

I. 導入

おはようございます。夏休みから帰ってこられた皆さん、お帰りなさい。楽しい休暇を過ごされましたか。海や湖、川に行った人はいますか。そこで釣りをした人はいますか。魚を食べましたか。魚が好きな人はたくさんいますね。



ところで、イスラエルに行ったら、ガリラヤ湖に行ってセントピーターズフィッシュをぜひ食べてみてください。とてもおいしい魚です。そして、その名から、ペトロが漁師だったことが思い起こされます。ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネはみな漁師でした。弟子たちの中に他にも漁師がいたかもしれません。また、イエスの弟子は皆、ある意味で漁師になるよう召されています。主が皆さんを漁師になるよう召しておられるとご存知でしたか。そう聞いて少し戸惑いましたか。



弟子たちを召し出され始めたころ、イエスが何とおっしゃったか覚えていますか。マタイ 4:18-20 「4:18 イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。4:19 イエスは、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた。4:20 二人はすぐに網を捨てて従った。」ペトロとアンデレに始まり、イエスに従う者は誰でも、人間をとる漁師になるよう召されています。私たち皆がその召しに一生懸命応えますようにと、私は祈ります。それは、主の教会が主の聖なる御名をたたえる人々で満たされるためです。

今日の聖書箇所、ペトロは人間をとる漁師としての働きに精を出しています。それは私たちの良き模範です。では、使徒 9:32-43 を読みましょう。

II. 聖書朗読 使徒言行録 9:32-43, (新共同訳)

9:32 ペトロは方々を巡り歩き、リダに住んでいる聖なる者たちのところへも下って行った。
9:33 そしてそこで、中風で八年前から床についていたアイネアという人に会った。 9:34 ペトロが、「アイネア、イエス・キリストがいやして下さる。起きなさい。自分で床を整えなさい」と言うと、アイネアはすぐ起き上がった。 9:35 リダとシャロンに住む人は皆アイネアを見て、主に立ち帰った。

9:36 ヤッファにタビタ——訳して言えばドルカス、すなわち「かもしか」——と呼ばれる婦人の弟子がいた。彼女はたくさんの善い行いや施しをしていた。 9:37 ところが、そのころ病気になって死んだので、人々は遺体を清めて階上の部屋に安置した。 9:38 リダはヤッファに近かったので、弟子たちはペトロがリダにいると聞いて、二人の人を送り、「急いでわたしたちのところへ来てください」と頼んだ。 9:39 ペトロはそこをたって、その二人と一緒に出かけた。人々はペトロが到着すると、階上の部屋に案内した。やもめたちは皆そばに寄って来て、泣きながら、ドルカスが一緒にいたときに作ってくれた数々の下着や上着を見せた。

9:40 ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。 9:41 ペトロは彼女に手を貸して立たせた。そして、聖なる者たちとやもめたちを呼び、生き返ったタビタを見せた。 9:42

このことはヤッファ中に知れ渡り、多くの人が主を信じた。9:43 ペトロはしばらくの間、ヤッファで革なめし職人のシモンという人の家に滞在した。

III. 教え

私がミズーリで育ったころ、土曜の朝は「スポーツマンの友」というテレビ番組をよく見ました。番組の主題歌は「夢見ていないで、釣りに行った」という歌でした。とてもおもしろい番組で、釣りがうまくなるコツなどをいろいろ教えてくれました。しかし、番組が終わって主題歌が流れると、その意味がよくわかりました。番組を見るのは楽しいですが、夕食に魚がほしければ、釣りに行かなければいけないということです。



この番組は、釣り名人ハロルド・エンズレーの司会で48年間続きました。アメリカ中、年齢を問わず誰もが、ハロルドの釣りの様子を見ました。彼は毎回、何かすごい獲物を釣りました。多くの人たちがハロルドの釣り番組を見ましたが、その中で実際に釣りに出かけた人はどれくらいいただろうかと思えます。多くのクリスチャンも、有名な伝道者の話を聞いたり、世界中に福音を広めた宣教師の話を聞いたりするのは好きですが、どれくらいの人実際に釣りに行くでしょうか。人間をとる漁師になるようにと召された私たちは、釣りに出かけなければなりません。

ペトロはそのことを理解していました。今日の聖書箇所の際に、ペトロの家に行ったら、きっと彼の奥さんが、主人は釣りに行ったのでまた後で来てくださいと言ったでしょう。**使徒 9:32**には、「ペトロは方々を巡り歩き、リダに住んでいる聖なる者たちのところへも下って行った。」とあります。ペテロはイスラエルとサマリアのあちこちを旅していました。クリスチャンを訪ねたり、イエスの復活と恵みの福音についてまだ聞いたことのない人々に良き知らせを分かち合ったりしていたのです。その旅で、リダという場所にたどり着きました。



使徒 9:33-34「そしてそこで、中風で八年前から床についていたアイネアという人に会った。9:34 ペトロが、「アイネア、イエス・キリストがいやしてくださる。起きなさい。自分で床を整えなさい」と言うと、アイネアはすぐ起き上がった。」アイネアがすでにイエスを信じる信徒であったかどうかは書かれていませんが、この出来事が起こってからは、おそらくイエスに熱心に従う者となったでしょう。ペトロのしたことに注目してください。ペトロはこの町に着き、必要のある人を見つけて、その人に信仰をもって語りかけます。その内容は、イエスに栄光をもたらすものでした。ペトロがこの人を癒すわけではありません。そのことをはっきりさせようと、このように言います。「**イエス・キリストがいやしてくださる。**」

私たちがイエスの福音を分かち合おうとするとき、ペトロの模範に倣いましょう。私たちをとおして癒しの奇跡を行うのは、神のご計画ではないかもしれませんが、神にとって不可能ではありません。主は昨日も今日もとこしえまでも変わらないお方です。とにかく、神が私たちをとおして目に見える奇跡を行われるかどうかにかかわらず、私たちがペトロと同じようにできるということです。つまり、出かけて行って、必要のある人を見つけ、イエスの名によってその人たちに仕え、神の愛を示し、神に栄光をお帰しするのです。空腹の人に食べ物を、渴いた人に水を与えましょう。ひとりぼっちの人には友だちになり、くじけそうな人を励ましましょう。そうやって人に仕えながら、イエスの御名を大胆に語ることで、イエスに栄光をもたらすことができます。

リダからそう遠くないところに、地中海沿岸の町ヤッファがありました。この町には、私たちが今話していたようなイエスの御名による良い働きを熱心にする女性がいました。**使徒 9:36-37**「ヤッファにタビタ——訳して言えばドルカス、すなわち『かもしか』——と呼ばれる婦人の弟子がいた。彼女はたくさんの善い行いや施しをしていた。9:37ところが、そのころ病気になって死

んだので、人々は遺体を清めて階上の部屋に安置した。」ヤッファの信徒たちはペトロが近隣の町リダにいると聞き、二人の人を送ってペトロを迎えに行かせました。

ヤッファからリダは15kmほどです。ということは、この二人がペトロを迎えに行き帰る往復で30km以上の道のりを歩くこととなります。ですから、ペトロがヤッファに着くまでに数時間かそれ以上経っていたでしょう。この時、ヤッファの未亡人たちは、自分たちに服を作るなどしてめんどろを見てくれた大切な女性の死を悼んでいました。そこにやっとペトロが到着します。使徒 9:40「ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、『タビタ、起きなさい』と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。」

確かではありませんが、ペトロはひざまずいて祈るまで何が起こるかわかってはいなかったでしょう。二人の人がリダから来て、信仰にある姉妹が死んだので一緒に来てほしいと頼まれました。ペトロは行きましたが、神がタビタを死からよみがえらされることを前もってペトロが知っていたという気配はまったくありません。私たちもまた、悩みや喪失体験で悲しみ傷ついた兄弟姉妹に神の家族として寄り添うよう示されることがあります。そんな時はたいてい、神が私たちをどう用いてくださるのかわかりませんが、とにかく行って祈り、主を求めたら、私たちにすべきことが示されるでしょう。

ペトロは、他の人たちに部屋から出るよう言いました。きっと、主の前に静まり、祈って、主の御声に耳を澄ますためでしょう。ペトロがどのように祈ったか、また祈りの中で主がペトロに何を語られたかについては明らかではありません。しかし、その結果は明白です。ペトロが祈り終わって起き上がる時、それはタビタが起き上がる時でもありました。使徒 9:41「ペトロは彼女に手を貸して立たせた。そして、聖なる者たちとやもめたちを呼び、生き返ったタビタを見せた。」神がタビタを死からよみがえらされた後、ペトロは彼女の死を悲しんでいた人たちを呼んで、生き返って元気な彼女の姿を見せました。彼女が死んだことを確認した人々は、神が彼女に新しい命を与えられたことの証人となったのです。



ペトロは釣りに出かけ、主が網をいっぱいにされました。リダ、そしてヤッファで、大漁となり、多くの人々がイエスを信じ、神の家族に加わりました。使徒 9:35「リダとシャロンに住む人は皆アイネアを見て、主に立ち帰った。」使徒 9:42「このことはヤッファ中に知れ渡り、多くの人々が主を信じた。」教会は急成長を続け、エルサレムから宣べ伝えられた福音は、どんどん広まっていきました。

アダム・クラークの聖書注解書は、イエスの復活から使徒 9 章までに 8 年が経過したと推測しています。この間、教会は迫害のときも平和なときも劇的な成長をつづけました。しかし、使徒 10 章以降で起こる出来事に比べると、ここまでの教会成長はおだやかなほうです。というのも、使徒 10 章以降では、福音が異邦人の間に力強く宣べ伝えられるようになるからです。

使徒 9:43 に、これから起ころうとする事の予兆が見られます。「ペトロはしばらくの間、ヤッファで革なめし職人のシモンという人の家に滞在した。」たいていの人々は、この箇所をあっさり読み流してしまいます。しかし、革なめし職人の家にペトロが滞在するというのは普通では考えられないことなのです。革なめしという職業がユダヤ教の律法で汚れていると見なされていたかどうかは、聖書学者たちの間で意見が分かるところです。しかし、律法がどうであれ、革なめし職人が動物の死骸と日常的に接触するので、ユダヤ教の指導者たちは彼らを嫌っていました。



にもかかわらず、ペトロは革なめし職人のシモンの家に滞在しました。ですからここで、当

時のユダヤ人の間で一般的だった偏見が、ペトロからなくなりつつあることがわかります。そして、使徒 10 章に入ると、イエスの福音が世界中のすべての民に届けられる扉が開かれ、主はペトロの心に残っていた偏見も砕かれます。

初めから、神が人々の救いをみこころとしてくださっていることは明らかです。創世記 12:3 でアブラハムに語られた神のことばを考えてみてください。「あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」神がこの預言的なことばで宣言されたように、来たるべき救い主はアブラハムの子孫であり、地上のすべての人の救い主なのです。イエスは罪の赦しと永遠の命という賜物を信じる者すべてに無償でくださいます。しかし、当時のユダヤ人は世界中を救う救い主を求めてはいませんでした。彼らが求めていたのは、イスラエルの救い主、ユダヤ人のメシアだったのです。



こういったことについて人が考えを改めるには時間がかかります。ですから、イエスはご自身がすべての人の救い主であることを弟子たちに再三念押しされました。単刀直入に語られることもあれば、それとなく示されることもありました。マルコ 11 章は、すべての人に対する神の愛についてイエスが人々に気付かせようとなさっている一例です。マルコ 11:15-17 「11:15 それから、一行はエルサレムに来了。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。11:16 また、境内を通って物を運ぶこともお許しにならなかった。11:17 そして、人々に教えて言われた。[こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の／祈りの家と呼ばれるべきである。』／ところが、あなたたちは／それを強盗の巣にしてしまった。]」これはかなりはっきりと語っておられる個所です。すべての国の人がエルサレムの神殿の境内で祈れるべきだというわけです。では今度は、イエスがペトロと弟子たちにそれとなく語られた個所も見てみましょう。その前に、少し脱線させてもらいます。

2 世紀のギリシャの詩に「オピアンの狩り四巻」というものがあります。これは、オピアンの詩だと言われています。この詩は釣り、漁師、魚についての詩です。とくに、魚について多くを語っています。その詩の一節をご紹介します。

「乾いた地から遠く離れた海の深みを漂う魚。岸边には寄り付きもしない。すなわち、活きのいいマグロ。ジャンプとスピードで右に出るものはない。メカジキだ。シャチの大群、……コリーサバ、……そしてシイラの一族。……水夫の慕うブリモドキ。彼らは船の水先案内人。」

この詩はおもしろい文学作品であると同時に、海水魚の分類を細やかに示すものでもあります。これが聖書と何の関係があるのかと思っておられるでしょうか。実は、4 世紀の著名な神学者ジェロームが、ヨハネ 21 章の解釈でこの詩を引用しているのです。

ヨハネ 21 章は、イエスが死からよみがえり、エルサレムで弟子たちにあらわれた後、ペトロと他の弟子たちがガリラヤ湖に戻り、ペトロが釣りに行こうとしている場面です。彼らが魚を釣っていると、イエスが岸边にあらわれ、舟の右側に網を投げるよう言われます。すると網がいっぱいになり、彼らはそれがイエスだと気付きます。ペトロは急いでイエスに会いに行こうと舟から水に飛び込んで泳いでいきます。それから弟子たちはイエスと朝食をともにします。しかしその前に、ヨハネ 21:11 があります。「シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。」



獲れた魚の数がはっきり書かれていますが、聖書学者たちはこの 153 という数が象徴的な数

だと声を揃えます。しかし、その解釈については意見がまちまちです。その中で、ジェロームの解釈が非常に興味深いと私は思います。その注解の中で、ジェロームは「オピアン」の「狩り四巻」を引用し、古代ギリシャでは、世界中の魚が 153 種類に分類されていたといます。もしそうなら、元々漁師だったペトロや他の弟子たちは、そのことを知っていたでしょう。ですから、彼らの獲った 153 匹の魚は、世界中のすべての種類の魚を象徴しているわけです。こういうわけで、ジェロームは、獲れた 153 匹の魚もまた、主が弟子たちにすべての国の人々に福音を宣べ伝える祝福について教えられた例のひとつだと解釈しています。

これがもともとの意味であったかどうか、私たちは知り得ません。とはいえ、すべての国の人々を主が心にかけておられることを主がいろいろな方法で語られるということを改めて思い起こさせてくれます。使徒 10 章では、主がペテロのうちにあったわだかまりを解消させ、ペテロは、神がすべての国の人々を愛しておられることをはっきりと知らされます。

IV. 結び

今日のメッセージは、クリスチャンが人間をとる漁師になって福音をすべての場所で宣べ伝えなければならない、ということが焦点でした。イエスの御名を多くの人を知るようになるためです。しかし、私たちが漁師になる前に、私たち自身が魚とならなければなりません。つまり、イエスの愛にとらえられ、元気にされた者となる必要があるということです。主とともに歩むには、アイネアのように癒しを受けなければなりません。また、新生したクリスチャンとしての人生を歩むためには、タビタのように死からよみがえらされなければならないのです。イエスなしには、私たちは罪の中に死んだ者です。しかし、神は罪と死に対するすばらしい解決策を与えてくださいました。イエスを信じ、イエスの御名を呼び求める者には、神が恵みとあわれみを与え、新しい命へと救いだしてくださるのです。最後にエフェソ 2:4-5 を読みましょう。「2:4 しかし、**憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、** 2:5 **罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、——あなたがたの救われたのは恵みによるのです——**」アーメン。祈りましょう。

V. 祈り